

被災地の「ふるさと」は遠くにおりて
思ひもの...?

九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 No.279
2016(平成28)年3月3日(木)発行



■報道であやふやかな言葉に出会うと不安です。甘利大臣が「政治家の矜持(矜持)として辞任する」とか、天皇がフィリピン訪問で「マニラの市街戦で、膨大な数の無辜のフィリピン市民が犠牲になりました」等々。○矜持(矜持)とはくきょうじ・きんじ>で、「自負。誇り。プライド」のこと。無辜とはくむこ>、「罪のないこと。罪のない人」と「広辞苑」にあります。■一方、「戦争危険法」を「平和安全法」と言い、「武器輸出」を「防衛装備品移出」と国民を欺瞞しています。本来、「原子力発電」は「核発電」と、「原発事故」は「核災」と言うべきですが、私たちもメディアも騙されたままです。小賢しい官僚たちの悪智恵です。

※※「表現の自由」が侵されようと、イヤもう侵されています!

高市早苗総務相の「電波停止」発言に 全国で抗議の声あがる

メディアへの政治権力介入が進んでいる!?

高市総務相が放送法4条違反を理由に放送局へ「停波」を命ずる可能性を繰り返し言及し、「表現の自由」の危機ですが、2月29日キャスターやジャーナリストの鳥越俊太郎らは、「私たちは怒っている」と声明を発表。3月2日には、樋口陽一東大名誉教授ら5人は記者会見で「違憲」と抗議。「怖い」「メディアへの圧力だ」「電波は国民のもの、政府のものではない」「マスコミ自身が萎縮せず、堂々と政府の圧力をはねのけよ」「NHKはじめ、読売・産経新聞は政府の御用報道機関だ」など、抗議が相次いでいます。

ニュースキャスター降板は、テレビ局の萎縮なのか

テレビ朝日「報道ステーション」の古舘伊知郎、NHK「クローズアップ

現代」の国谷祐子、TBS「NEWS23」の岸井成 格の各キャスターが3月で降板します。偶然なのか、政府に批判的で圧力がかかったのでしょうか。圧力での降板だったら、戦前の日本やヒトラーの時代にもどったかのようです。私たち「九条の会」の活動に対しても重大な恐ろしい脅威となります。

▲「安保法案テレビニュースは どう伝えたか」

鎌田慧/解説 ¥600+税
かもがわ出版(ブックレット)

○この本では、NHKは榑井体制で「ニュース7」「ニュースウオッチ9」はすっかりアベ政権の広報機関化していること、「報道ステーション」「NEWS23」がなんとか政府への批判的姿勢を保っていると分析しています。

福島県の「九条の会」は 全県で108、相双地区に8の会

○「戦争法案」が成立し、「九条の会」活動がちょっと停滞したかのようですが、とんでもない。県内の各「九条の会」は、継続して「戦争法・廃案」「アベ政治を許さない」の運動を毎月展開しています。○私たちも他の地区の活動を見ならってやっていきましょう。

地 区	会 数
全県九条の会	10
県北地区	20
県中地区	10
県南地区	12
会津地区	31
いわき地区	17
相双地区	8
全 県 合 計	108

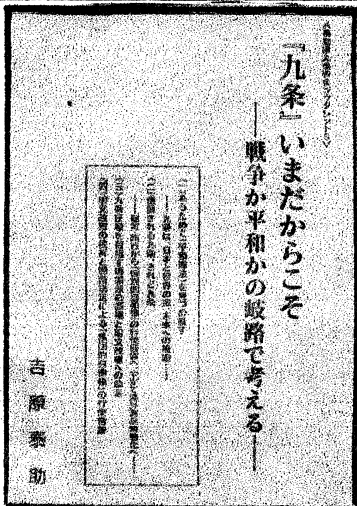
相双地区の九条の会(◎代表 ○事務局・敬称略)

しんち九条の会	◎目黒利彦 ○工藤憲治
相馬市九条の会	◎大内秀夫 ○新妻慎一
鹿島九条の会	◎相良正巳 ○柴田次男
相双教職員九条の会	◎浜名紘隆
はらまち九条の会	◎平田慶肇 ○早坂吉彦、山崎健一
小高九条の会	○佐藤金雄、世話人・志賀勝明
浪江町九条の会	◎馬場 績 (二本松市)
南双葉九条の会	◎早川篤雄 (楡葉町)



原発事故で死者出ていない、2013.6.7

**テレビより“本”を！
「九条の会」の本をどうぞ！**



○福島県九条の会代表吉原泰助著
『九条』いまだからこそ
—戦争か平和かの岐路で考える—

県九条の会ブックレット5として、昨年10月に発行。あらためて「平和憲法・九条」を見つめ直し、安保関連法破壊への展望として選挙での巻き返しや、安保関連法の違憲訴訟への期待が述べられています。1部300円。ご希望の方は事務局へお申し出ください。

○岩波ブックレット、¥520
浜矩子・柳澤協二・内橋克人講演集
『民主主義をあきらめない』
浜氏は「強者のためだけのドアホノミクスの経済政策」と糾弾、元内閣官房副長官補の柳澤氏は「自衛隊員の命を顧慮しない安保法制」と批判、経済評論家の内橋氏は「民意が反映されないアベ政治」と訴えています。昨年5月の鎌倉九条の会発足10周年記念講演を岩波ブックレットとして出版。講演なので分かり易い。

<日野行介>の本が読まれています

- 日野孝介・毎日新聞出版 ¥1512
『原発棄民 フクシマ5年後の真実』
- 日野孝介『福島原発事故・被災者支援政策の欺瞞』 岩波新書 ¥780
- 日野孝介『福島原発事故・県民健康管理調査の間』 岩波新書 ¥760
日野氏は1975年生まれの毎日新聞記者。3冊とも一般メディアでは報道されない隠蔽、欺瞞、秘密主義「国・福島県・医大」の県民を見捨てている状況を厳しく論破。

◆まだ読んでいないのに、書名だけ紹介の本もあり恐縮です。お許しください。

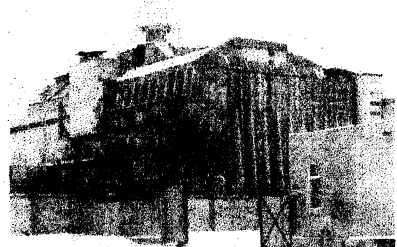
30年前のチェリノバイリ事故は今も・

1986年4月26日午前1時23分、当時ソ連のウクライナ共和国キエフ州北部、プリピャチ市のチェルノブイリ原発4号炉の重大事故から、30年になります。

<2015年ノーベル文学賞受賞>

○スペトラーナ・アレクシェービッチ著・松本妙子訳
『チェルノブイリの祈り』岩波現代文庫

¥1040+税
事故直後、放射能など全く知らされずに消火活動に動員された消防士たち、数分で死に至る高濃度の放射線の中で防護服も与えられずシャ



ツ一枚で消火活動にあたる。モスクワの病院に送られ、全員怪物のようになり凄惨な死を。1999年9月の東海村臨界事故の「朽ちていった命」とまるで同じです。サマシヨール（わがままな人々）と呼ばれても、汚染地に留まり生活する老人たち等々の、おぞましい体験集。この事故から学んでいればと悔しい。チェルノブイリ原子炉の石棺<写真>は崩落し始め、また福島第一原発も収束にはほど遠く事故はまだ始まったばかりです。現在の福島の被災地と重なり、若松丈太郎さんの詩『神隠しされた街』を読みかえしてみました。

飯館村の苦悩は 浜通りも小高区も同じです

原発事故の避難区域が次々解除されようとし、住める住めない、戻る戻らない、町や村や地域は再生復興できるのか、浜通りの苦悩は深刻です。その典型として南相馬市の隣りの「飯館村」に関する本も続々出版されています。

○大渡美咲『それでも飯館村はそこにある』

産経新聞出版 ¥1300+税
著者は1983年飯館村生まれの産経新聞記者。震災後の12年10月から15年5月まで福島支局員として、全村避難の飯館村を取材。3月1日に発行。一気に読めます。

○長谷川健一・長谷川花子『まていな村、飯館』

七ツ森書館 ¥1800+税
飯館村生粋の酪農家、長谷川健一さんと奥様の花子さんの2014年7月の著作。3.11以後の原発事故被災の8人家族のこと、酪農家、行政区長や県酪農協理事としての対応を、自ら撮影の写真とともに、克明な重い体験記録です。

○掘米 薫『あきらめないことにしたの』

新日本出版社 ¥1400+税
飯館村の渡邊とみ子さんたち“母ちゃん”が、原発事故に負けないで奮闘のようすを児童文学風に描いた。

○塩谷弘康・岩崎由美子『食と農でつなぐ』

○千葉悦子・松野光伸『飯館村は負けない』 岩波新書

○3月の新刊 長泥記録誌編集委員会編・¥2400

『もどれない故郷ながどろ』芙蓉書房出版

美しいけど悲しい「長泥」の写真と村民の体験集。